

2011年9月7日

瀋陽化工大学訪問記

電気電子工学専攻 小林春夫

1. はじめに

瀋陽化工大学（沈阳化工大学 Shenyang University of Chemical Technology）の袁徳成 副校長先生 Prof. Yuan Decheng よりご招待のメールをいただき、下記のスケジュールで2011年9月1日(木)から9月5日(月)まで同大学を訪問させていただいた。

Dear Professor 小林春夫

I here represent Shenyang University of Chemical Technology sincerely invite you to visit our College of Information Technology this year, the cost of which will be fully paid by us. It will be warmly welcomed if you would give us a speech on the current research progress. Shenyang University of Chemical Technology and Gunma University have shared a harmonious friendship, cooperation and communication for more than 20 years, and several professors that come before to give speeches had been greatly appreciated. We believe that this visit will certainly be another successful and memorable event. We are grateful for all the help and assistance you and the faculty at Gunma University has long offered our exchange students, particularly your guidance to Li Murong. Were it probable for you to arrange this visit, we may discuss the details in the future. Again, we look forward for your reply.

Vice Principal of Foreign Affairs

Prof. Yuan Decheng

Shenyang University of Chemical Technology

Thursday, Sept. 1, 2011

13:25 Depart from Narita International Airport

15:30 Arrival at Shenyang Taoxian Airport

18:00 Welcome party, by foreign affairs department

Friday, Sept. 2, 2011

09:00 Touring of Campus

09:30 Meet with Principal Prof. Pang Yujun

10:00 Prof. Haruo Kobayashi give a talk

11:00-11:30 Quest and communication with students
12:00-13:30 Welcome lunch, by Information Engineering College
14:00-15:30 Visit Lab
16:00-20:30 Party, by alumna of Gunma University

Saturday, Sept. 3, 2011

08:10 Start to tour Benxi Water Cave
12:30 Taste Old side dumplings
14:00 Visit Shenyang Imperial Palace
15:30 Depart for Dalian city
20:00 Arrive at Dalian

Sunday, Sept. 4, 2011

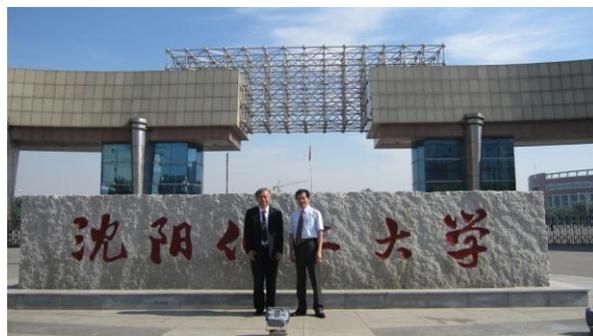
09:00-18:00 Touring of Dalian

Monday, Sept. 5, 2011

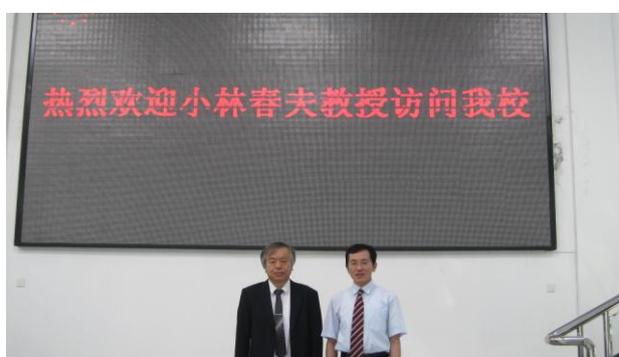
08:00-09:50 Visit Information Department of Dalian University of Technology
10:00 Start to go Dalian Airport
13:00 Departure to Narita Airport



袁徳成先生（右）と大学図書館前で



李安東先生（右）と大学入口で



2. 群馬大学との姉妹校関係

同大学と群馬大学とは20年以上にわたり姉妹校であり、これまで化学系学科、生産システム工学科の先生方を中心に交流を深めてきたとのことである（お恥ずかしい話であるが、私は詳しくは知らなかった）。2009年10月より同大学の電気工学科からの交換留学生(学部 特別聴講生) 李慕容さんを研究室に受け入れているのがご縁で今回御連絡を受けた。

群馬大学では同大学との関係の基礎を、化学系の大澤善次郎先生が築かれ、久保田仁先生が発展させ、現在研究室後継者の黒田眞一先生が継承・発展させているとのことである。（群馬大学の化学系の何人かの先生はこれまで何人も同大学と交流をしてきている。）また、近年では生産システム工学科 保坂純男先生、楠元一臣先生、尹友先生等が同大学を訪問されているとのことである。とくに、同大学には久保田先生の研究室で博士号を取得された、また訪問研究員としておいでいただいた先生方が何人かおられる。電気電子工学科からは今回私が初めての招聘とのことである。

国際教育学院長の李安東先生 (Prof. Andong Li) が常に同行してくれ、ご説明いただいた。

3. 瀋陽化工大学

同大学名は瀋陽化工大学であるが、とくに「化学工学」に特化していることではなく（化学系の先生の数は6分の1程度）、電気系・情報系を含めて広い工学分野をカバーしている。瀋陽市の郊外にあり、1km 四方の広大なキャンパスである。図書館、各学科の建物は非常に立派で設備も充実している印象を持った。周りが工業地帯になっており、地元企業はもちろん省を越えた企業とも産学連携は活発に行われている。大学構内に新しい建物がどんどん建てられているようで、急速に発展しているという印象である。非常に大規模な大学という印象であるが、中国では中堅の大学とのことである。（中国は人口が多く、日本での感覚とは異なるとおもった。）

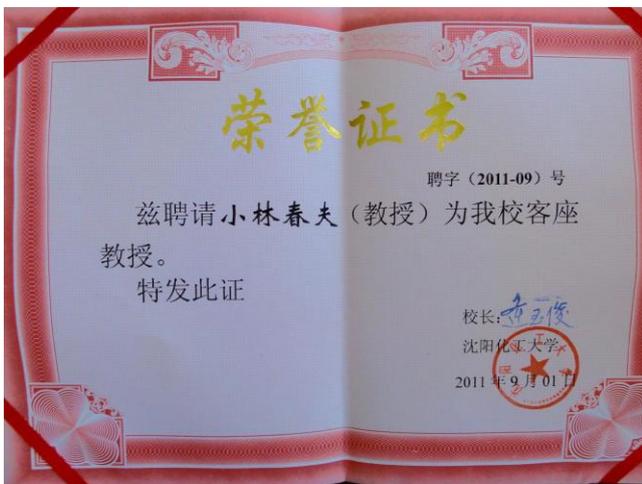


瀋陽市の大学進学率は50%を超えており、日本企業は約1000社が進出している。瀋陽市は2年後に（世界規模の）陸上競技の会場になるということで、あちこちでその準備の工事が行われている。また、遼寧省からは日本に留学する学生が多いとのことである。（私の研究室の中国からの留学生の何人かは同省およびその近隣の省の出身である。）



Yujun Pang 学長にも面会させていただき、同大学「客座教授」の称号をいただいた。Changsong Wan 副校長先生をはじめとして Gia Sheng Nian 先生、Liping Fan 先生、Lina Ma 先生、Wei Lifeng 先生、Shan Shi 先生、Yajuan Tian 先生、第一線で研究をされている若手・中堅の先生方から説明を受け、話をさせていただいた。また国際教育を担当されている Chmaberlain Zhang さんにも大変お世話になった。

群馬大学と私の研究室の紹介のプレゼンテーション、学生との質疑応答の機会をいただいた。さらに、群馬大学で訪問研究員、博士課程取得をされた先生方との懇談会を開催していただき、大歓迎を受け、内心非常におどろいたというのが正直なところである。

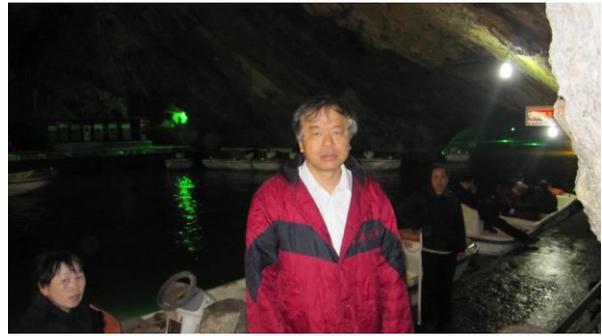


4. 中国の自然と歴史

9月3日(土)、4日(日)に観光につれて行っていただいた。

本溪水洞 (Benxi Water Cave) 観光

2km にわたる世界最大の自然の洞窟水道で、ボートに乗って観光した。中国は自然のスケールが大きいと思った。瀋陽からの同所への途中は緑豊かであり、これらは漢方薬の薬草・原料になるので漢方薬の工場が多数あるとのことである。(中国東北部すべてが緑豊かなわけではなく、場所によるとのことである。)



Prof. Xuejun Zong (右)

沈阳故宫 (Shenyang Imperial Palace) 観光

瀋陽市は「清朝 (後金)」の最初の首都でありその王宮が保存されている。
後に遷都した北京での王宮はこの10倍とのことである。



5. 旅順にて平和と戦争を思う

私は なぜこれほど歓迎してくれるのかの瀋陽化工大学の真意を知りたかった。
李先生と何日か話をしていて次のようなことが分かった。

李先生は20数年前に九州大学に留学しており、日本文化・社会を熟知し日本語も堪能である（御子息も現在日本で会社勤めをされているとのことである）。

「アジアは広大であるが、その中で東アジア地区に焦点を当てて考えれば、一つの文化圏であり、その中で平和は重要である。そのためにはそれぞれの国の若者を中心に国際交流をはかっていく必要がある。自分は群馬大学と富山県立大学が担当である。富山県立大学からこの9月に20-30名程度の学生の短期滞在を受け入れる。初級中国語講座30時間程度、中国社会文化講座30時間程度（そのうち半分は座学、残りの半分の時間は大学近辺の工場等の見学）を提供するが、無事うまくいくかどうか緊張している」と話されていた。

群馬大学からも来年FLCプログラムで何人か学生を受け入れてくるとのことである。
民間レベルでの国際交流が重要であると何度も言われていたのが印象に残っている。

第2次大戦終了直後、米国フルブライト上院議員は交換留学制度の法案を提出し、その制度で世界中の多くの若者を米国大学に招いてきている（フルブライト留学制度）。フルブライト氏自身が若い時に海外留学をしており、その経験からお互いの国の文化・人々を理解することが国際平和を推進すると考え、交換留学生制度を提案したと言われている。

李先生の言葉を聴き、このことを思い出した。李先生の国際交流の仕事の個人的な強い動機は東アジア地区での長期的な平和に貢献したいということのように感じられた。留学先の国はその留学生にとって第二の祖国となる。瀋陽化工大学から群馬大学留学の同窓生達との懇談会から 彼ら/彼女らは その指導教員(久保田先生)を第二の父親と思っているとの印象を受けた。李先生はご自身の日本留学経験から留学生の気持ちが分かるのであろう。



日露戦争の大激戦地である大連市の旅順区は大連市中心から比較的近くに位置する。
旅順には日露戦争の遺跡・祈念碑が多数残されており、それらを巡りながら平和と戦争について思った。

6. 大連理工大学訪問

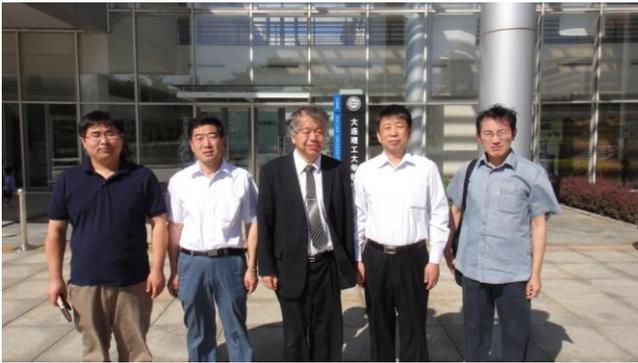
最終日に袁徳成先生のご案内で、大連理工大学の電子情報工学部長 Prof. Tang Zhen An に面談させていただき、IC 設計研究室 (Prof. Wang Wei) を訪問させていただいた。若手の Prof. Xiaoming Chen は 2009 年まで東芝、STARC に勤務されていたとのことである。同大学は Intel, Mentor Graphics, Agilent, IMEC, 幾つかの日本企業と連携している。米国の大学の先生方も招聘して講義をしてもらっている。近くにソフトウェアの会社 (中国最大のソフト会社 NeuSoft 等) が集積しているとのことである。



Tang Zhen An 先生 (左)



Wang Wei 先生 (右)



Xiaoming Chen 先生 (最左)



なお、大連理工大学とも群馬大学は姉妹校関係を持っている。

大連市では地下鉄を整備するための大きな工事が行われており、また空港では日本人ビジネスマンも目に付いた。同大学、大連市は急速に発展している印象をもった。

7. 最後に

電気電子分野でも群馬大学と瀋陽化工大学との関係を深めていきたいと強く決意した。

謝辞

お世話になった瀋陽化工大学、大連理工大学の方々、これまで同大学との友好関係を築かれてきました群馬大学の方々に感謝いたします。

群馬大学 生産システム工学科 黒田眞一先生からのメッセージ

瀋陽化工大学は、瀋陽工業大学など、近隣の大学や、何よりも遼寧省政府との関係が強く、中国における私たちのパートナーとして、大変重要な大学であると思っています。幸い、教員や学生の交流も盛んな状態が続いておりますので、これからもこの関係を大切にしていきたいと考えています。個人的にも、李安東先生とは兄弟のようなお付き合いをさせていただいており、2000年には3か月ほど瀋陽化工大学に滞在していたこともあり、瀋陽は第2の故郷のように感じています。

遼寧省、瀋陽市の情報

以下は 石川信宣 技術専門職員がインターネットで調べてくれた瀋陽化工大学のある遼寧省、瀋陽市関係の情報である。



中国 遼寧省



瀋陽(Shenyang)、大連(Dalian)

瀋陽市：

瀋陽市（しんようし、英語:Shenyang）は中華人民共和国遼寧省の省都。欧米諸語では、ムクデン（Mukden）のほうが用いられた。中国東北部（満洲）の主要都市の一つ。市名は、「瀋水ノ陽」の意味で、市内の南部を流れる渾河の古名・瀋水の北に位置することから由来した。国家歴史文化名城に指定される観光都市でもある。経済的重要性から省クラスの自主権をもつ副省級市にも指定されている。市区人口は506.6万人、都市圏人口は786万人と東北地方最大の都市である。瀋陽の歴史は大変古く、7200年前には定住集落（新樂遺

跡)があったことが知られている。その後はしばらく地域の重要地方都市的な位置にあった。遼寧省 瀋陽市 は第二次世界大戦の頃は奉天と呼ばれ、張作霖がいた場所でもある。瀋陽南駅は、東京駅と同じデザインである。

唐代は瀋州が置かれ、元代には瀋陽路、明代には瀋陽中衛が設置された。

17世紀初、サルフの戦いに勝利した満洲族のヌルハチは後金を建国、瀋陽を都城と定め、1634年(順治元年)には盛京(満洲語ムクデン)と改称された。その後清と国号を改めた後金は1644年(天聰8年)に明朝の滅亡後の中国を支配し、北京に遷都するが、盛京はその後も副都とされた。1657年には奉天府が設置され、形式的ながら中央政府に準拠した官制が整備され、現在でも副都としての瀋陽故宮が残っている。1664年(康熙3年)には承德県が新設され、奉天府の府治とされた。

19世紀後半以降、それまで漢民族の移動が認められなかった満洲が、ロシア帝国の南下政策に対抗すべく、禁地政策が解禁され開発が急速に推進されると、瀋陽は地域の中心としての役割を担うようになった。

1910年(宣統2年)には承德県が廃止され、県域は奉天府の直轄とされ、1912年(民国元年)、辛亥革命により清朝が滅亡すると、2月に承德県と改称されたが、河北省に同名の承德県が存在したことから5月には瀋陽県改称された。その後は中華民国臨時政府を巡る混乱の中、1923年(民国12年)には奉天市が設置され奉天省の省会とされた。1929年(民国18年)にはそれぞれ瀋陽市、遼寧省と改称されている。その後は張作霖や張学良を代表とする奉天軍閥の拠点となった。しかし鉄道駅を中心とする市街地の大半は南満洲鉄道の付属地とされ、日本が行政権や警察権を掌握していた。

1931年満洲事変により関東軍に占領されると、奉天市と再度改称、1945年(民国34年)、日本の敗戦後により中華民国に施政権が移管されると、瀋陽市と再改称されている。1949年には中央直轄市に昇格、1954年に地級市に改編され遼寧省の省会として現在に至る。

瀋陽市は地級市(地区クラスの市)として9市区、1県級市、3県を管轄する。

市区： 和平区、瀋河区、皇姑区、大東区、鉄西区、於洪区、東陵區、蘇家屯区、
瀋北新区

県級市： 新民市

県： 遼中県、康平県、法庫県

工業が盛んであり、市の郊外には多くの重化学工場が立ち並んでいる。瀋陽市内のみならずその近隣都市圏は撫順の石炭・鞍山の鉄鉱石、やや遠いながら黒竜江省大慶市の油田などの豊富な資源を生かした一大コンビナートであり、20世紀後半の中国を工業面で支えた。この中には、戦闘機生産(瀋陽飛機工業集団)、自動車生産(華晨汽車、ドイツBMWの生産)などもある。

瀋陽を始めとする満洲は、近年外資を導入した長江デルタや珠江デルタ地域の経済発展に習おうとしている。このため中国政府は東北振興を旗印に東北開発を重点的に支援しており、瀋陽も近代都市に変貌しつつある。中国最大のソフトウェア開発・ITサービス会社（東軟グループ）も本社を置いている。2003年の全市生産総額（GDP）は1,602億人民元で、全省の4分の1を占める。

満洲国時代の在留日本人： 安部公房（小説家） 小澤征爾（指揮者） 冬柴鉄三（政治家）